

2021年度国際研究フォーラム

International Research Forum 2021

日本の宗教文化を撮る

Capturing Japanese Religious Culture

報告書

Report

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

Institute for Japanese Culture and Classics,

Kokugakuin University

2023.2

もっと日本を。もっと世界へ。



國學院大學

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
2021年度国際研究フォーラム
「日本の宗教文化を撮る」報告書

目次

はしがき	3
開催概要	5
国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」	
「仏像の3D計測と「お身代わり仏像」—仏像盗難と地域社会の現在—」大河内智之	7
「いまドキュメンタリーを撮るとのこと —寺院のCOVID-19対応から考える—」ティム・グラフ Tim Graf	15
「カジュアルに真面目に、映像（映画・ドラマ・番組）で伝える神社」山咲 藍	29

はしがき

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所 所長

平藤 喜久子

誰もがカメラを持ち歩き、カメラに撮られる日常を送っている。ほとんどの人々が、折に触れて写真を撮り、カメラに写り込んでいる。街には防犯カメラも溢れており、車にもドライブレコーダーという名でカメラがついている。撮り、撮られることは、意識せずとも日常になっている。

本報告書は、2021年12月に國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所の主催で開催された国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」における議論をまとめたものである。

2014年にInstagramの日本語サービスが開始され、2017年には「インスタ映え」が流行語大賞を撮った。だれもが写真を撮って発信するようになった時代に、私たち研究者はどう撮ることに向き合っていく必要があるのか。何を知る必要があるべきなのだろうかと考えるようになった。

1980年代、ジェイムズ・クリフォードら文化人類学者たちは「文化を書く」という行為をめぐる議論をした。研究者は学術的な行為として「書く」ことを行う。客観的に記述しているつもりでも、そこには書き手の意図が否応なく紛れ込んでしまう。書き手と書かれる側の関係、言語の違いも書くときには影響を受ける。では、「文化を撮る」ことはどうだろうか？写真は「真を写す」と書き、あたかも客観的で真実を写しだしているように思われる。しかし、同じ場所であってもまったく同じようには撮れないように、実は撮ることもさまざまな思いや条件の制約を受けるのではないだろうか。

こうした問題意識のもとに構想されたのが、今回の国際研究フォーラムである。この議論をきっかけに、「撮る」ことの危うさと魅力を感じて頂けると幸いである。

開催概要

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
2021年度国際研究フォーラム
「日本の宗教文化を撮る Capturing Japanese Religious Culture」

2021年12月11日、國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所では、「日本の宗教文化を撮る」ことをテーマとして2021年度の国際研究フォーラムを開催し、その難しさ、面白さ、危うさ、楽しさについて議論した。概要を以下に記す。

◇国際研究フォーラム「日本の宗教文化を撮る」

【日時】 2021年12月11日(土) 13時30分～17時30分

【場所】 Zoomによるオンライン開催

【報告者・題目】(※報告者の所属は当時のもの。敬称略・発表順。):

- (1) ティム・グラフ (南山大学助教) 「いまドキュメンタリーを撮るとのこと—寺院のCOVID-19対応から考える—」
- (2) 大河内智之 (和歌山県立博物館主任学芸員) 「仏像の3D計測と「お身代わり仏像」—仏像盗難と地域社会の現在—」
- (3) 山咲 藍 (映像制作会社スタジオブルー脚本家、プロデューサー) 「カジュアルに真面目に、映像 (映画・ドラマ・番組) で伝える神社」

コメンテーター (敬称略):

田中雅一 (国際ファッション専門職大学副学長、京都大学名誉教授)

港 千尋 (多摩美術大学教授、写真家)

司会:

平藤喜久子 (日本文化研究所所長)

【使用言語】 日本語

【主催】 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

本報告書には、上記の国際研究フォーラムにおける報告内容をもとに、報告者の方々にご執筆頂いた報告要旨を掲載している。そのため、タイトルや内容など、報告の際のものから若干変更されている場合がある。また、報告要旨における執筆者の肩書きは2023年2月現在のものとなる。

仏像の3D計測と「お身代わり仏像」 —仏像盗難と地域社会の現在—

大河内 智之
(奈良大学准教授)

はじめに

和歌山県立博物館では、平成22年（2010）より文化財の3Dスキャナーによる計測（＝撮影）と3Dプリンターによる造形化を、和歌山県立和歌山工業高等学校と連携し、継続して行っている。その目的は二つある。一つはさわれる資料による展示のユニバーサルデザイン化であり、もう一つは複製を活用した文化財の盗難防止対策である。本報告では二つ目の目的である盗難防止のための活用のあり方について紹介し、計測（＝撮影）データの活用による地域社会への学術の貢献のあり方についての事例として共有することとしたい。

1 多発する仏像盗難被害とその構造

今、全国で、仏像など寺社に所蔵される文化財の盗難被害が多発している。施錠された収蔵庫から重要文化財が盗まれたという犯行例もあるが、より深刻な問題は、被害の中心となっているのがそうした著名な指定文化財ではなく、集落ごとにひっそりと祀られてきた仏像であるということにある。

盗難被害発生の要因（盗む側・盗まれる側）としては、大きく次の2つが考えられる。

- ① 需要の拡大（仏像愛好の広がり、古美術市場の広がり活性化）と、それに伴う卑劣な犯罪者の出現。
- ② 人口減少、高齢化によるコミュニティの縮小に伴う管理体制の弱体化による犯罪抑止力の低下。

このように現在は、需要の高まりによる換金目的の犯罪者の誘発と、地域の構造的問題による犯罪の抑止力の低下が、不幸にも一致してしまっている時代であるといえる。特に地域の寺社をとりまく構造的な問題は今後さらに深刻化していくことが予想される。

2 和歌山県における仏像盗難被害

和歌山県では平成22年（2010）春ごろから翌年4月にかけて、連続60件、仏像172体を始めとする文化財の盗難事件が発生した。被害に気づいていない事例もあると想定されるので、その数はさらに多かったとみられる。被害に遭った場所のほとんどは、地域住民によって管理される無人の寺（堂）や神社（小祠）であった。

平成23年4月、犯人が逮捕された。住所不定で車中泊をしていた男で、日中に下見をし、夜中に犯行に及び、大阪の古物商に持ち込み続けていた。文化財に対する知識はなく、手当たり次第の犯行であった。買い取っていた古物商は共犯関係にはなかったが、結果的に犯罪を拡大させた張本人といえる。古物商の手元にあった転売前の文化財については警察が回収し、捜査の進展の結果、元の所蔵者が判明したものは返されたが、被害地域の多くは文化財の写真やデータもなく、最終的に43点が所蔵者不明のまま取り残され、その後和歌山県立博物館で引き取り管理し、4点については博物館で所蔵者を見つけて返却できた。ほか、のちに古美術商のカタログに掲載された被害品（紀の川市・円福寺の仏像）を発見し、買い戻したのも一部あるが、多くは行方不明のままとなっている。

平成28年から再び増加傾向となり、29年・30年にかけて、和歌山市・岩出市・紀の川市の10か所の寺院で60点以上の文化財が盗まれている。30年3月に盗まれた紀の川市・西山観音堂の十一面観音立像（紀の川市指定文化財）は像高182.4cmの平安時代後期の仏像である。こんなに大きな仏像でさえ被害に遭っているのが現状である（図1）。

被害後、NHKによる被害状況の報道（6月1日）の際に本像の画像が示されたが、直後に転売先が判明し警察によって回収された。また、同じころに盗まれた岩出市内の寺院の本尊像が、6月にインターネット上のオークションサイトに出品されているのを筆者が見つけ、ただちに警察へ通報し、回収に結びつけることもできている。ほか、警察の尽力により回収された仏像もあるが、多くは取り戻せていない状況である。

仏像や神像は、信仰の核として、また精神的紐帯として長く継承されやすく、地域の歴史を物語る重要な資料といえる。仏像を奪い去る行為は、地域や人々の歴史と尊厳をも奪い去る卑劣な犯罪である。地域のシンボルともいべき仏像の盗難被害は、物的な被害に留まらず、喪失感や自責の念など、所蔵者や地域住民の心にもダメージを負わせる。このような物的・精神的な二重の被害にあわないためには、とにかく盗まれないための対策をただちに講じていく必要がある。文化財に関心をもち、写真撮影、寸法等データの把握を行った上で、厳重な施錠、防犯用ライトやベルの設置等々、防犯体制の構築が望まれるが、そうした対策さえ難しい地域が増えている。誰もが当事者として文化財を守る方法を、生み出していかなければならない。



図1 盗難被害を受けた西山観音堂

3 文化財の複製を活用した文化財の保全と信仰環境の維持

地域の中で守られ伝えられてきた文化財は、地域とのつながりを失うことなく、そのままの環境で維持・管理されていくことが最善であるが、防犯・防災の観点からやむを得ず他所に移さざるをえない事例があり、博物館はそうした場合の移動先として資料の寄託を受けてきた。ただし仏像等を移すことは信仰環境が大きく変容することであり、心理的なハードルは大きい。

和歌山県立博物館では平成22年度より、県立和歌山工業高等学校と連携し、視覚障害者の学習支援のため、3Dプリンターによるさわれる文化財レプリカを作成しているが、この文化財レプリカを、防犯環境の整わない寺院や神社に安置し、盗難被害防止につなげる活用を平成24年度から継続して行っている。製作の工程は次のとおりである。

- ①3Dスキャナーを用いて資料を様々な角度から非接触で計測（撮影）し、3Dデータを作成する（図2）。
- ②CADを用いて、必要に応じて3Dデータに修正を施して完成させる（図3）。
- ③完成した3Dデータを3Dプリンターに入力し、ABS樹脂やASA樹脂等（プラス



図2 3Dスキャナーによる計測作業



図3 CADソフトによる3Dデータの調整作業

チック)で出力。

- ④出力したパーツを組み合わせ、サンドペーパー等で磨いて下地処理を施す。
- ⑤レプリカの表面を、和歌山大学学生がアクリル絵の具で着色して完成 (図4)。



図4 着色作業

製作に当たっては、資料の取り扱いは学芸員が行い、データ計測やデータ修正などは高校生との共同作業となる。担当教員と技術面での事前事後の検討や、教育面での目標設定、授業進行の調整など、相談を行いながら実施し、学校のカリキュラムに組み込むことができていることが、継続の上で重要な要素となっている。

こうした作業を経て、これまでに製作した複製仏像・神像の安置先は次のとおりである (令和4年11月段階。安置済みは15ヶ所、29体)。

表1 複製仏像・神像一覧

平成 24 年度	紀の川市	林ヶ峰観音堂	1 体	菩薩形坐像（平安時代）
	紀の川市	中津川行者堂	3 体	役行者及び前後鬼像（室町時代）
	田辺市	滝尻王子宮十郷神社	1 体	滝尻金剛童子立像（平安時代）
	有田川町	某神社	1 体	女神坐像（平安時代）
平成 25 年度	かつらぎ町	三谷薬師堂	10 体	女神坐像・男神坐像（平安時代）
平成 26 年度	紀の川市	円福寺	1 体	愛染明王立像（江戸時代）
平成 27 年度	紀の川市	薬師寺	1 体	薬師如来坐像（平安時代）
	海南市	海雲寺	1 体	釈迦如来坐像（南北朝時代）
平成 28 年度	紀の川市	横谷区茶所	1 体	仏頭（平安時代）
	高野町	花坂観音堂	1 体	阿弥陀如来坐像（平安時代）
平成 29 年度	有田川町	下湯川観音堂	1 体	観音菩薩立像（平安時代）
	すさみ町	持宝寺	3 体	阿弥陀三尊像（南北朝時代）
平成 30 年度	田辺市	観音寺	1 体	観音菩薩立像（平安時代）
令和元年度	九度山町	慎尾山明神社	2 体	高野明神立像・白鬚明神坐像（平安時代）
	紀の川市	大国主神社	1 体	権大明神立像（江戸時代）
令和 3 年度	海南市	大崎観音堂	1 体	宝冠釈迦如来坐像（室町時代）
	高野町	大滝丹生神社	2 体	丹生明神・高野明神坐像（南北朝～室町）
令和 4 年度	かつらぎ町	極楽寺	1 体	菩薩半跏像（飛鳥時代）※重要文化財

なお、こうして製作した文化財の複製は、「はじめに」にもふれたようにさわれる文化財レプリカとして和歌山県立博物館内に設置し活用している。視覚に障害のある方への情報提供の効果的な方法として、またあらゆる利用者がより楽しくより深く情報を得るためのツールとして利用するもので、博物館展示のユニバーサルデザイン化の特徴的なあり方を示すものとして、平成26年度内閣府バリアフリー・ユニバーサルデザイン推進功労者表彰内閣総理大臣表彰を受賞している。

4 「お身代わり仏像」による信仰環境の維持—撮影・造像・投影—

仏像・神像の複製を提供し、安置するにあたっては、「信仰の対象が複製でいいのか」という声（あるいは内心の思い）が上がるのが想定された。ただ実際に提供してみると、地域住民から「夜も安心して寝られる」といった感想をいただくなど好意的で、複製を拒絶する声は当事者からは意外なほど聞こえてこず、「お身代わり」という呼び方で受け入れられている。それだけ当事者にとって深刻な問題であったということであるが、それとともに、制作に携わった県立和歌山工業高等学校の生徒や和歌山

大学学生が現地を訪れ、地域住民と実際に会って、コミュニケーションを図り、その上で複製を奉納する取り組みも行っていることも特記したい(図5)。地域住民が生徒・学生に製作に際しての苦勞を尋ねたり、あるいはねぎらいの言葉をかけるなどする中で、それが単なるレプリカではなく、訪れた高校生・大学生が当該地区のために作った仏像であるという固有の「物語」が付随していることを実感し、受け入れへの心理的なハードルを下げる効果が得られている。高校生・大学生にとっても、現地の状況を肌で感じ、社会の課題の解消に役立ったという実体験を通じて、学習効果を高めている。

この取り組みは信仰の根源となる仏像を「撮影」(3D計測)し、「造像」(3Dプリンターによる出力)し、さらにそこに固有の歴史性を「投影」することで、過疎化・高齢化に直面する地域における信仰の場の維持と、文化財(仏像)の保存を両立させるものである。仏像の新たな撮影手法は、新たな仏像造像の手法にも、新たな文化財保存の手法にもつながりうるといえるが、あくまで手段と目的を逆転させず、そして「みんな(=公共)で守る」ことの実践となっていることに意味があるのではないかと考えている。



図5 有田川町下湯川観音堂への奉納のようす(平成29年7月28日)

付記

シンポジウムにおいて、以上の内容について事例紹介として報告し、参加者とのディスカッションを行ったところ、本事例について関心を持っていただいたティム・グラフ氏（本誌報告2、参照）から、「お身代わり仏像」の製作と奉納についてのドキュメンタリー撮影の申し出をただちにいただいた。その時点で令和3年度事業としての複製製作は、高校生によるデータ計測や出力に関しては終了していたが、着色の仕上げ作業及び、和歌山県高野町の大滝丹生神社への奉納事業が残されていたので、調整の上、3月18日、19日の両日に取材と撮影を行っていただいた。撮影・編集されたコンテンツは、以下の通り YouTube にて公開されている。ぜひご照覧いただきたい。

- ・「バリアフリー仏教？ 3Dプリンターの最新技術で仏像のレプリカを作る事！」

https://www.youtube.com/watch?v=_T1fVQtdNMA&t=185s

- ・「仏像・神像盗難と防止」

https://www.youtube.com/watch?v=Y8WO_EwxjD8

参考文献

- 大河内智之「ロビー展「仮面の世界へご招待」がもたらしたもの—さわって学ぶ展示の重要性—」（広瀬浩二郎編『さわって楽しむ博物館—ユニバーサル・ミュージアムの可能性—』青弓社、2012年）
- 大河内智之「さわられる展示と博物館のユニバーサルデザイン」（『文化庁月報』529<WEB版>、2012年）
URL: https://www.bunka.go.jp/pr/publish/bunkachou_geppou/2012_10/series_04/series_04.html
- 大河内智之「さわられるレプリカとさわって読む図録—展示のユニバーサルデザイン—」（『博物館研究』49巻3号、2014年）
- 大河内智之「仏像を守る 和歌山県の事例から考える防犯対策」（『大法輪』85(7)～85(9)、2018年）
- 大河内智之「博物館機能を活用した仏像盗難被害防止対策について—展覧会開催と「お身代わり仏像」による地域文化の保全活動—」（『和歌山県立博物館研究紀要』25、2019年）
- 大河内智之「さわられる文化財レプリカとお身代わり仏像—3Dデータで歴史と信仰の継承を支える—」（国立歴史民俗博物館監修・後藤真・橋本雄太編『歴史情報学の教科書 歴史のデータが世界をひらく』文学通信、2019年）
- 大河内智之「博物館がつなぎ公共で支える地域資料—仏像盗難をめぐる問題を通じて—」（小川義和・五月女賢司編『発信する博物館—持続可能な社会に向けて—』ジダイ社、2021年）

いまドキュメンタリーを撮るとのこと —寺院のCOVID-19対応から考える—

ティム・グラフ Tim Graf
(マンチェスター大学講師)

はじめに

本稿では、寺院のCOVID-19対応をテーマにしたビデオとその制作方法を紹介する。映像の単なる分析だけではなく、その成立過程も明らかにしたい。パンデミック状況下のフィールドワークにおける倫理的な問題をはじめ、ドキュメンタリー制作の計画、撮影の実施、編集の流れについて考察する。また、教育の手段としての「映像」の可能性を考え、映像の配信方法と注意点も明確にしたい。

ドキュメンタリーを撮るといことは、ストーリーを語ることを意味する。筆者は、宗教研究のストーリーをドキュメンタリーとしてわかりやすく伝えることを目的としている。「仏教寺院がCOVID-19にどのような対応を取ったか」という疑問をもち、学術論文を執筆した⁽¹⁾。しかし、論文と共にドキュメンタリーを公開することによって、論文の内容をさらに明らかにすることを目指している。私のドキュメンタリーの視聴者としては、主に日本の宗教文化を学ぶ学生が多いが、受講生以外の、日本の文化について詳しくない人々にも、宗教研究の魅力を説明することは重要だと考える。

対面とリモート実践の割合

COVID-19が日本においても拡大して以降、どのようにして宗教者は3つの密を避けるのかということについて、学者もメディアも宗教者のWeb法要やリモート瞑想などの可能性に焦点を当てた⁽²⁾。仏教者のオンライン活動も確実に増加してきた。宗派を超える「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査」を担当した小川有閑（大正大学地域構想研究所研究員）はオンライン対応について、次のような調査結果を上げている。

「(9) 新型コロナウイルスの影響を受けて、新たにはじめたことがあれば教えてください」には244名が回答した。その中で最も多い回答は、オンライン対応で

あった。検討中を含めると半数近い112名がオンラインでの発信に取り組んでる⁽³⁾。

私も最初は、外出せずにパンデミックと仏教に関する記事をインターネットで検索した。また、メールやZOOMを通じてインタビューを行った。以前のフィールドワークで実際に会ったことのある僧侶と、インターネットを通じて連絡を取ることができたが、オンラインでは、寺院の実情を把握することに限界も感じた。親交のない僧侶に新たにオンライン・インタビューを依頼することも難しい。そのため、2021年の春からは遠方の寺院ではなく、当時住んでいた名古屋市および愛知県を中心に、寺院の現状を調査した⁽⁴⁾。結果として、実際に現場に入る重要性、教育におけるドキュメンタリーの必要性も改めて理解することができた。事例として、名古屋の大須の商店街にある万松寺を紹介する。

亀岳林万松寺

亀岳林万松寺（きがくりんばんしょうじ）はかつて、武将の寺だった。戦国時代の1540年に、織田信長の親族によって創建された。当時武士以外の、裕福な人々も檀家として認められていたが、檀家の総数は約20軒のみで、一般の人々は入檀することができなかった。現在は、万松寺に10階建てのオフィス・ビルも併設されている。物価が高く、人通りの多い大須の商店街にある人気の寺院である。

万松寺は近年まで曹洞宗の寺院であったが、4年ほど前に独立し、単立寺院となった。万松寺は15年ほど前から納骨堂も設置し、現在はおよそ7000軒の家が契約者となって、永代供養を行っている。現代的な納骨堂をはじめ、現世利益信仰の場所としても有名である。一番人気があるのは不動明王を祈りの対象とする護摩祈祷である。その他、坐禅や写経が行われ、「大人の寺子屋」という法話会もほぼ毎週開催される。祭りや年中行事も大人気だ。例えばスジャータまつりが毎年12月に開催されている。私も2018年、パンデミックの前に一度見学した。

スジャータまつりは釈迦が悟りを開いた日を祝う行事である。スジャータとは、伝説によると、釈迦を救った女性だ。厳しい修行で衰弱した釈迦が、スジャータに乳粥をもらって助けられ、菩提樹の下で坐禅を行って悟りを開いた。この伝説をテーマにしたスジャータまつりでは、ミルクが無料で振る舞われる。コップに願いを書き、ミルクをもらい、そしてコップを戻すという流れには祈願の要素も含まれる。Meiraku（スジャータめいらく）が祭りのスポンサーとなったのは偶然ではない。大須のアイドルグループも参加し、アイドルたちにもコップを渡して、願いを書いてもらうということが行われる。その後、集められたコップは後日、護摩祈祷において焚かれる。仏教の伝説と実践を現代的な様式においてクリエイティブに行っていることが万松寺

の特徴だといえよう。

COVID-19感染拡大の影響で、2020年のスジャータまつりも、2021年の祭りも中止された。パンデミックが全国の寺院や神社、観光地に経済的な負担を及ぼす状況が現在においても続いている。仏教寺院の場合、葬送儀礼の変更を余儀なくされている。葬儀の多様化と簡素化は、決して新しい現象ではない⁽⁵⁾。しかし、パンデミックとともにさらに進行し続けていく。再び小川有閑によると、パンデミック下における葬儀の簡素化は特に首都圏において進行している⁽⁶⁾。ソーシャルディスタンスを守るために質素な葬儀が増え、パンデミック発生前には大規模な葬儀の場に関わっていた役僧が失業してしまうこともある。

しかし、パンデミックの状況において、祈祷の依頼が実際に増加してきたケースもある。万松寺の場合、健康に関連した祈祷の需要が以前より30~40パーセント上昇したという。

万松寺のコロナ対策

万松寺のコロナ対策について、「御朱印や写経、ネットでゲット」という記事が、朝日新聞デジタル（2020年4月29日）に掲載された。

「自粛ストレスの軽減にと始めたのが、家でお経を書き写したり、仏画に色をつけたりする「写経・写仏（しゃぶつ）チャレンジ」。寺のウェブサイトから素材をダウンロードできる。[...]できあがったら名前と住所を書いて寺へ郵送するか、境内の納経箱へ納めれば、後日、お焚（た）き上げ祈禱（きとう）をし、カード型お守り（縦5センチ、横3センチ）がもらえる。自粛要請が終わる頃合いを見て、終了する。」⁽⁷⁾

私は「これは面白い」と思い、これらの実践について調べるため、2021年春に万松寺に問い合わせた。しかし、意外なことに、万松寺の住職は、寺院での対面およびリモートでの活動のあり方について、記事に書かれていることとは、やや異なる反応を見せた。住職によれば、確かに記事に書かれたような活動もしているが、コロナ対策としては、むしろ寺院における対面での活動を優先しているという。筆者によるインタビューの際には次のように説明していた。

写経とか写仏というのは、コロナですけど、コロナ対策として相手が来てもらっています。リモートワークではなくて、ここにきて、実際に広い場所でやっていただいて何かをしています。インホームでやるとき、それでメンタルが本当に集中

できるのかという、人はちょっと難しいようで、やはり場所を変えて、コンディションを変える事で、専念することは、要因になるんだらうと私は考えたので、広いホールの中で10人ほどでやっていただくという方法を今はコロナの中などにあえてお呼びしています。

更に、坐禅もインホーム、つまり寺院において対面で行う活動として議論されたが、万松寺の坐禅会の参加者たちも、同様に寺院において坐禅を行うことの有効性を主張した。これらを受けて、筆者はコロナと仏教をテーマとして、授業で利用できるような短編のドキュメンタリーを作成することにした⁽⁸⁾。

以上のように、万松寺の関係者を対象とするインタビューと彼らの宗教実践の撮影が宗教学への様々な問いを明確にすると考えている。一つ目は、オンラインと対面の役割についてだ。フィールド調査を行うことによって、すなわち現場から見た仏教を研究することによって、オンライン実践と対面活動のそれぞれの意味付けがわかるようになる。万松寺の場合、驚くべきことに、感染のリスクがあるにもかかわらず、オンラインや家でできる活動より、寺で行う実践の方が大事であると住職も参拝者も指摘した。しかし、彼らの声はニュースに取り上げられていなかった。二つ目は、教義と実践の役割、あるいは実践の場所の意味についてだ。次に宗教とモノの文化をテーマに考察する。

宗教とモノの文化

祈祷など現世利益のための宗教実践や、葬儀や祖先祭祀の実践にも、特定の施設、特定のモノの文化が必要だ。たとえば、換気を行う装置がないと、堂内の護摩祈祷も行うことができない。さらに、万松寺の納骨堂においては、あの世に対するイメージが、視覚的文化でどのように伝わっていくかという疑問がある⁽⁹⁾。納骨堂の天井にはランプが飾られているが、住職によれば、二つのオレンジ色のボールは平和な魂を象徴する。納骨堂を選ぶ際にデザインで決める人々がいるのも事実だ。

モノの文化というのは、教義の単なる象徴だけではなく、宗教そのものを積極的に形成してきたものだ。もちろん、仏教教義の研究も重要だが、ある教えがどのような形で伝わるかという問題も存在する。宗教におけるモノの文化、物質文化が、宗教概念への意味付けをはじめ、救いや癒しなどの実現にどのような役割を果たすか、宗教学の重要な課題である。ビデオの撮影を通して、宗教のビジュアル文化、つまりモノの文化の視覚的な側面を撮ることができる。これを分析することは、宗教概念の見直しにもつながるのではないだろうか。



写真1 平和な魂を表すライト（万松寺の納骨堂）



写真2 位牌と墓が一体となって設置され、ここに関わる人々のコミュニティを形成している（万松寺の納骨堂）

ドキュメンタリーの制作過程

【倫理・許可・内容の確認】

最初に万松寺を訪れた際、ビデオ撮影を依頼することを控えた。オンライン記事によると、万松寺はコロナ対策としてリモート実践を行っていたため、オンライン実践について、「ZOOMや電話を利用して聞くことができるか」というように尋ねたが、ご厚意により対面にて対応してもらった。マスクを着用し、十分に換気が行われている広い部屋で、ソーシャルディスタンスを保ちながら、インタビューを行うことができた。本稿はその内容を取り上げたものである。また、研究を進めるため別の機会にビデオインタビューを依頼した。

私個人の見解だが、パンデミックでなくても、最初からビデオ撮影を依頼することは避けた方が良いと思われる。まず挨拶をして、お互いの信頼関係を構築してから撮影の機会について検討するべきだ。その際に研究計画をまとめて、撮った映像の利用について共有する。私は、ビデオをインターネットで公開する前に、万松寺の担当の方に事前に確認してもらった。確認を得るのに時間を要したが、これは後のトラブルを避けることにもつながる。

論文と大きく異なる点だが、ビデオにおいては、インタビューの内容に合わせて、それに対応した宗教実践を撮影することが必要となる。例えば、インタビュー中に祈祷の話がなされたならば、それに合わせて祈祷が実践されている様子を撮影することが望ましい。坐禅や写経も同じだ。そのため、何度も万松寺に足を運び、祈祷大会や朝の坐禅なども撮影した。

【プライバシーと著作権の問題】

宗教施設の風景や実践を撮る際に、人の顔がカメラに写り込んでしまうことについてどうすべきか、数多くの研究者が頭を悩ませているのではないだろうか。感染のリスクと同じく、プライバシーに関わるリスクの感覚が人によって違うため注意が必要だ。寺院の撮影の許可を得るのはもちろんだが、参拝者の撮影の許可も必要だ。担当者の申し出で、突然の撮影に対し許可がおりることも多くあり、参拝者には撮影後許可を取ることもある。いずれにせよ参拝者のプライバシーの保護に気を付けるべきだ。

プライバシーの問題への対策として、レンズが交換できるカメラが撮影に向いているように思われる。ビデオの編集に顔が見えないように加工することはできるが、あまりきれいではない。これに対して、そうしたカメラを用いることで、編集ではなく、撮影中に対策ができる場合がある。たとえば、フォーカスや「ボケ」を利用して、プライバシーを守るための対策が、撮影中にもある程度できることになる。

事例（写真3）において、フォーカスは僧侶の顔に合わせられているが、背景はレンズボケではっきり見えないようになっている。これは撮影後の編集の際に追加した画像効果ではなく、レンズとカメラの設定によるものである。アパーチャー（絞り）、フォーカス、ISO感度などをマニュアル・モードで設定すれば撮影の際のコントロールが可能になる。ただし、場合によってはレンズのNDフィルター（サングラスのようなもの）が必要になるので、練習は必要である。



写真3 写り込んだ人物のプライバシーをレンズボケで守っている事例

また、画像の解像度によって、編集時に拡大することもできる。この方法を利用して万松寺のビデオでは顔が見えないように編集した（写真4）。

元の映像では、歩く人の顔が見えたが、クロップして画像の一部を切り出すことによって顔がフレームに入らないように調整した。

しかし、そもそも映像の解像度に留意しておくべきだ。元の映像を4K（3840×2160）の解像度で撮影するならば、その映像を1080pのプロジェクトおよびタイムラインに乗せることで、編集時に拡大することも可能になる。逆に、1080pで撮影した元映像を1080pのタイムラインに乗せて編集すると、解像度が足りないので拡大した際に映像のクオリティが落ちてしまう。

さらに、著作権違反を避けるのも重要である。撮影中にラジオから音楽が流れていれば映像として使えなくなってしまう可能性が高く、事前に対策を取らなければならない。より良いクオリティの映像を撮影するためには、エアコンやストーブ



(Tim) You previously told me that some worldly benefits became increasingly popular during this epidemic.

写真4 クロップして顔を見せないようにしている事例

なども事前に運転を停止させておくことが望ましい。通常であればエアコンのような生活音は気にならないが、カメラで撮影すると音が目立つこともあるのである。

【カメラとマイクの選び方という妥協】

最新のスマートフォンならカメラの性能も良い。ただし音声については、ビデオ専用のカムコーダーを除いて、ほとんどのカメラのマイクの性能はドキュメンタリーには不十分である。撮影の実施と使用機材の選択を考慮すると音声も重要である。性能が良いマイクでも、屋外で使用すると雑音が入ってしまっていて、撮影ができなくなってしまうこともあるため、事前に十分にテストしておくことが望ましい。音量が足りない場合、ある程度編集集中に修正することもできるが、雑音はうまく修正できない。そのため、マイクにウィンドノイズ削減機能を持つフィルターを付けたりするなど、撮影前に準備しておくべきこともある。

宗教施設にかかわるフィールドワークの撮影は、多くの場合「ランアンドガン」(run and gun) の撮影であり、静止しての、あるいは動きが少ない撮影ではない。そのため、カメラ、レンズ、三脚、ジンバル、マイク、ライト、メモリーカード、バッテリーなどのギアを、現場や自分のニーズに合わせて選択する必要があることになる。それらのギアのレンタルは可能ではあるが、使い慣れていなければ、高価で高性能なカメラをレンタルしたとしても、撮影に使うにはリスクが高い。単純に、高いカメラで撮影すれば、より良い映像が撮れるようになるということではない。

多くの場合、カメラより投光やライトの利用の仕方の方が重要である。カメラの設定について知識を持って慣れ親しんでおくことや、撮影現場の事情に合わせて適切にライトを利用することは、良い映像を撮影するのに不可欠であり、これについては定期的に撮影と編集を行って練習しておくことが必要であると考えている。宗教文化に関係するフィールドワークと撮影においては、インタビューを除いて、ほとんどの場合ライトのコントロールはできないだろう。結果として、理想の画質にならなくても、手元にあるギアを可能な限り活用して撮影することが、実地での体験的な学習となるのである。

映像を撮ることは、妥協することを意味する。カメラの選択も、妥協の産物である。例えば、本格的なシネマカメラを使用すれば最も美しい映像を撮影できるが、不便なところも多くあり、購入してそのまま使うことは難しい。場合によっては外付けのバッテリーやモニターも購入しなければ実際には使用できない。また、三脚やジンバルの利用を前提としたシネマカメラでは、スタビライザーはないため、手持ちでの撮影には練習が必要で、手振れの問題が起りやすい。逆に、近年は写真にも映像にも使えるハイブリッドカメラの機能が圧倒的に進化してきており、これはフィールドワークでの使用に向いている。日本のどのメーカーも、適切にビデオ撮影を行うことができるカメラを多く出すようになっている。

写真用のレンズが手元があれば、それに合わせてカメラを選ぶことも考えられる。将来は別のカメラを使うとしても、レンズについては、そのまま利用することができる。そのため、カメラよりむしろレンズの方を重視すべきだと考える。しかし、それも妥協につながる。例えば、カメラのメーカーによってはマウントが異なり、カメラのモデルによってはセンサーサイズも異なるため、結果として特定のカメラしか選べなくなるだけではなく、場合によっては特定のメーカーの環境やエコシステムに入らざるをえないことになる。最近では、フルサイズのカメラが人気を集めている。見た目によって流行しているだけでなく、感光性が良いため暗い時でもきれいな映像を撮ることができるなど、確かに良い点があるが、しかし高価で重いフルサイズのレンズしか使えないなど、不便な点もある。結局のところ、自分のニーズに合わせてカメラを用意する必要があるだろう。

最後に、データ管理も重要なテーマになる。現在は8Kや12Kの撮影は可能となったが、4Kにしても、解像度やコーデック、すなわち映像のデータの圧縮に合わせたメモリーカードの処理速度に注意し、また編集するパソコンの処理能力や記憶媒体の容量も必要となる。また、カメラによっては、利用できるメモリーカードも制限される。プロのシネマカメラの世界ではメーカー専用のメモリーしか使えないケースも少なくない⁽¹⁰⁾。

12-bit RAWや10-Bit ProRes 422などの動画圧縮の少ないファイルで撮った

映像は色彩の補正とカラーグレーディングに最も有用である。ファイルサイズは大きいがパソコン用の編集で使いやすい。しかし、カメラ本体側でのファイル保存にCFexpress タイプB等のカードが必要となる。カメラとデータ圧縮の種類によって異なっているため注意が必要となる。3時間のRAW撮影に使えるCFexpress タイプBのカードは、現在でも10万円以上するため、カメラの予算に計上しておく方が良いだろう。逆に、RAWではなく高圧縮率のデータ圧縮方式を用いると、撮影データのファイルサイズが小さくなり、処理速度の遅いSDカードでも撮影可能だが、そうすると編集するパソコンの処理の負担が増えるというジレンマに陥る可能性は高い。

以上のように、カメラ、センサー、レンズ、レンズマウントとマイク等のギアを総体として考えることに加えて、データ管理や編集用のパソコンも予算に含めておくことは、ドキュメンタリー制作において適切なアプローチであろう。特定のカメラを選ぶ問題だけでなく、そのエコシステムの限界はどこにあるか、つまり周辺のパーツが交換できるか、別のメーカーのカメラでも利用できるかどうかを考慮することは、ギアを持続的に使用していくことができるかという問題の答えにもつながる。

【編集・オーディエンス・配信】

次に、動画の編集と公開についても若干考察したい。Blackmagic DesignのDaVinci Resolve、AdobeのPremiere Pro、そしてAppleのFinal Cut Proという3つの編集ソフトが世界で最も人気があり、プロにも使われているものである。近年は、スマートフォンで映像を編集することのできるソフトも増えたが、制限が多くあるため、やはりパソコンやノートパソコンにおいて編集することが望ましい。どのようなソフトであっても、基本的な流れとしては、まずはビデオやオーディオのデータを読み込むことから始まる。そして、映像をカットすることによって、ストーリーを形作っていくことになる。その際に、ストーリーを語るための道具は、論文とは異なり、言葉だけに限定されず、映像で見えるもの、サウンド、音楽と色調補正（カラーコレクション）の後のカラーグレーディングをも含む。最後に、完成したビデオを書き出すことで終了となる。

編集の具体的な紹介は本稿の枠を超えるが、編集のすべてを、ストーリーを語るための道具であると理解すれば、編集の意義と課題が明確になるであろう。例えば、ストーリーに関していえば、誰のために語るかという問題がある。視聴者のニーズに合わせて、字幕を付けたり、内容を説明したりするか、あるいは監督の立場を隠すためにそれを行うか、編集という行為には多くの可能性が含まれている。ナレーションをビデオの後に追加して、解説を補足することも考えられる。筆者にとっては、

授業で使いやすい動画を制作するのが目的となっている。これまで数本のビジュアル・エスノグラフィーを制作しており、そのうち東日本大震災をテーマにしたものは、ワルシャワなどの国際映画祭で上映され、チューリッヒ国際映画祭では Golden Eye Award にノミネーションされた。様々な上映会に参加し、また学術大会などで上映と解説を行って、視聴した研究者たちとのやり取りから分かったのが、視聴者の中には日本の専門家もいる一方で、日本の文化について詳しくない者も多くいるということである。このことから、今では様々な視聴者の立場を想像して編集することを目指している。

近年は、撮影や編集の手段が増えると同時に、オンライン・ストリーミングの機会も増え、直接ネットで公開するのが主流となりつつある。筆者は、去年前までは学術関係のビデオをすべて Vimeo にアップロードしていたが、最近では YouTube 上で公開している。YouTube が Google と繋がってアクセスしやすい大規模なプラットフォームになっているからという理由に加えて、継続性にも魅力があると考えている。継続的にビデオが公開されていることによって、フィールドワーク全体の展開が可視化されるようになり、ビデオを通じて今後の研究や作成中の論文のテーマも紹介することができる。特定のテーマについてのシリーズも作成して公開することが可能となる。単体で独立した映画としてのドキュメンタリーにも魅力があるが、宗教文化の継続性を撮影していくことにも意味がある。宗教文化をより深く撮影できるような方法を考え、2021年に日本の宗教文化を撮るために始めた YouTube チャンネルを今後も育てていきたい。

おわりに

本稿では、万松寺の COVID-19 対応に焦点を当てるビデオを例に、4つのテーマを紹介して考察した。1) パンデミック状況下の宗教実践におけるオンラインと対面の役割の実情を把握するためにフィールド調査が必要だと主張した。2) プライバシー保護等にかかわる倫理的な問題を、ビデオの制作過程で解決する方法を幾つか示した。さらに、3) 教育の手段としての「映像」の可能性を検討し、教義と言葉の枠組みを超え、宗教をモノの文化から見ることによって宗教学を問い直すことを試みた。最後に、4) ドキュメンタリー撮影を検討している人への具体的なアドバイスとなるよう、カメラ選びの問題から映像の配信まで、編集の流れをまとめた。

これまで、映像を撮ることはストーリーを語ることであり紹介したが、最後に、記録としての映像の意義を述べておきたい。時が経つとともに、宗教文化に対する見方が変わっていき、信仰と実践の文脈も社会の変化とともに変わっていく。例えば、震災のナラティブがいかに変化してきたか、10年以上前に撮ったドキュ

メンタリーを観ることで驚くほど伝わってくる。当時、どのような時代精神、あるいはツァイトガイストがあったのか、どのように日本の宗教の未来と震災復興の発展が予想されていたのか、あるいは当時のインタビュー対象者たちは、どのような希望を持っていたのか。またそれを後から見て、視聴者が生きている社会的な現実とどのように結びつくのか、などといったことを考えることができるだろう。時間と空間の流れが感じられることには、教育的なメリットがあるのではないだろうか。

津波の直後だからこそ、パンデミックの最中だからこそ、ドキュメンタリーを撮ることによって、次の世代に当時の影響や宗教者の対応を記録して伝えることができる。筆者は現在、イギリスのマンチェスター大学の講師として日本の宗教と、仏教についての授業を担当しているが、日本でドキュメンタリーを撮りためておいてよかったと思っている。映像と論文の力で、3.11の時にまだ子どもであった受講生たちに当時の事情を多少なりとも理解してもらうことができる。COVID-19が日本の宗教と社会にどのような影響を与えるかについて、これからも研究が必要であり、ここで紹介したビデオをその小さな、しかし前に進むための一歩としたい。

注

- (1) Graf, Tim (2021): "Japanese Temple Buddhism during covid-19." *Bulletin of the Nanzan Institute for Religion and Culture* 45: 21-47.
- (2) 例えば次の記事を参照: "Leap of faith: Japan's religious institutions get innovative in pandemic." *Japan Times*, 2021.3.20. <https://www.japantimes.co.jp/news/2021/03/20/national/social-issues/religious-institutions-get-innovative-amid-covid-19/>
- (3) 小川有閑「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査③」(大正大学地域構想研究所ウェブサイト、2021.2.1 公開)。
https://chikouken.org/report/report_cat06/11572/
- (4) コロナの影響と仏教者の対応をテーマとした研究について、日本私立学校振興・共済事業団より研究助成を得た(「新型コロナウイルスの影響と仏教」日本私立学校振興・共済事業団 2021年度若手研究者奨励金。研究代表者: GRAF Tim)。
- (5) Rowe, Mark (2000): "Stickers for Nails. The Ongoing Transformation of Roles, Rites, and Symbols in Japanese Funerals." *Japanese Journal of Religious Studies* 27 (3-4): 353-378.
- (6) 小川有閑「寺院における新型コロナウイルスによる影響とその対応に関する調査②」(大正大学地域構想研究所ウェブサイト、2020.10.15 公開)。
https://chikouken.org/report/report_cat04/11296/
- (7) 小林圭・村上潤治「御朱印や写経、ネットでゲット:名古屋・万松寺が提供」『朝日新聞デジタル』2020.4.29. <https://www.asahi.com/articles/ASN4X764QN4TOIPE00N.html>.
- (8) コロナと仏教についてのビデオをオープンアクセスで公開している。
 - ・「コロナ禍の状況下祈りと瞑想【万松寺、その2】」: YouTube <https://youtu.be/iYcPBQ3BLy8>
 - ・"Prayer & Meditation during COVID-19 at Banshōji in Nagoya, Japan": Vimeo <https://vimeo.com/598900412>

- (9) 万松寺の納骨堂をテーマにしたビデオをオープンアクセスで公開している。
- ・「万松寺の納骨堂【万松寺、その1】」: YouTube <https://youtu.be/iv6Tngwf4yU>
 - ・“Consecrating a new Buddha Statue and opening a new indoor temple grave [Banshōji, part 3]”: YouTube <https://youtu.be/0-lmROMG1Ho>
- (10) 例えば、Redというメーカーのカメラを用いる場合には、同メーカー専用のメモリーが必要となり、同メーカーの、いわゆるエコシステムに入ってしまうことになる。

カジュアルに真面目に、映像（映画・ドラマ・番組）で伝える神社

山咲 藍

(映像制作会社スタジオブルー脚本家、プロデューサー)

はじめに

2021年12月、国際研究フォーラム「日本の宗教を撮る」というテーマでお話させていただいた。これはその内容の一部をまとめ直したものである。

研究者ではない私がこのような機会をいただいたのは、2018年1～2月に放送したNHK Eテレの『趣味どきっ!』という番組で、神社をテーマにした『福を呼ぶ!ニッポン神社めぐり』という全8回のシリーズを制作したことに始まる。國學院大學の平藤喜久子先生に出演、監修で協力していただき、番組は好評。第2弾として『幸せ運ぶ!ニッポン神社めぐり』(2019年12月～2020年1月放送)を制作した。神社関係者の方々が多く視聴してくださったという話も、平藤先生を介して伝わってきた。「うちの神社は撮影してくれないだろうか?」という声もあったと聞く。これは、番組の内容が評価されたということも大きいと思うが、制作者側が撮影対象である、それぞれの神社と丁寧にやり取りを行い、ルールを守り、様々な配慮をして番組を制作したことも大きかったのではないかと思っている。実際、ある神社の担当者と話をした際、他の番組の撮影では、約束の時間になっても来ない、連絡が直前にくる、荷物を放置したまま忘れて帰る、などのことがあり残念な気持ちになったとの話を聞いた。映画やテレビで映像が流れることにより、その場所の認知度が上がったり、お客さんが増えたりするメリットが撮影対象にはあるが、撮影はこちらがお願いしている立場であり、撮影場所に迷惑をかけないというのは基本中の基本である。神社に限らず、映画やドラマの撮影でも決まりを守らない、失礼な行為を繰り返すといった過去の行為により、撮影の許可がおりなくなった場所が少なからずある。そうならないため、実は私たちが見ている映像には「撮る前」と「撮った後」という見えないくさんの配慮が含まれている。では、どのような配慮が行われているのか。その具体例を挙げてお伝えしてみようと思う。

また、神社を「撮る」だけではなく、ドラマや映画の撮影に神社は欠かせない存在だ。撮影場所として借りる場合も多々あるが、撮影しなくても精神的な関わりがあるので

ある。それはいったい、どういう意味なのか。今回のテーマとは少しズレるが、その辺りもまとめさせていただく。とは言っても、他の先生方のように論文のような文章は書けないので業界の裏話を聞くような感覚で、画像やリンク先の動画を見ながらカジュアルに読んでいただければと思う。

1. 神社をテーマにした番組を制作しよう！

まずは『ニッポン神社めぐり』という番組の成り立ちを説明させていただく。それまで神社に特別な関心はなかったが、2017年に制作した映画『茅ヶ崎物語～MY LITTLE HOMETOWN～』（図1）という作品を手掛けたことがきっかけで、神社についてもっと知りたいと思うようになった。劇中で寒川神社や茅ヶ崎にある厳島神社などを取り上げ、神社の成り立ちや神様について調べていくと、他の神社や神様についても興味が湧いてくる。そこから、番組に企画を提案。『趣味どきっ！』という番組は主に30代以上の女性視聴者が多く、専門的すぎる内容は好まれないとのことだった。そこで、関心を持ってもらいやすい“ご利益”を切り口に、ご利益に合った神様を神話とともに紹介。日本人の生活に密接に関わっている神社と神様をカジュアルに学べる内容を考えていった。番組の内容を監修してくれる先生を探したところ、平藤先生に行き着いた。番組の司会進行、視聴者と一緒に学んでいく人として、MCは南海キャンディーズの山里亮太さん（以下、「山ちゃん」）。実は山ちゃん、お守りや御朱印帳を日常的に持ち歩くほど、神社好きな人であった。そこに毎回、ゲストとして俳

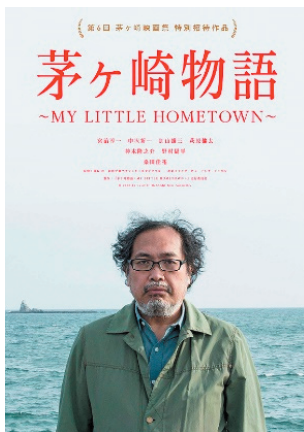


図1 映画『茅ヶ崎物語～MY LITTLE HOMETOWN～』（2017）監督：熊坂出
加山雄三や桑田佳祐をはじめ、数々のミュージシャンや文化人を排出した芸能の地、茅ヶ崎の秘密をドキュメンタリーとドラマを織り交ぜた映像で見せる音楽探訪記。桑田の学生時代を野村周平、友人の宮地を神木隆之介が演じた。

予告編 URL <https://www.youtube.com/watch?v=oQYc3WGI0Cw&t=1s>

優やタレントが加わり、神社をめぐりながら様々なことを学んでいく。

芸能人は神社好きな人が多いようだ。仕事で様々な土地に行くことが多いことも関係していると思うが、芸事という仕事柄なのか、「縁起」や「ご利益」に関心の高い人が多い。芸能・芸術にご利益があるという京都の車折神社（正確には車折神社の末社である芸能神社）に多くの芸能人が訪れることを見ても分かるだろう。平藤先生と打ち合わせを行い、どの神様を取り上げるか、どの神社が良いかを決め番組の制作がスタートした。（図2）



図2 『趣味どきっ!』はテキストが連動して発売される。テキストの監修も平藤先生が行った。写真は第1回目の撮影場所、東京大神宮にて、山里亮太さんと平藤先生。

2. 神社を「撮る前」の配慮

テーマとなるご利益、紹介する神様と神社を決めたら、撮影したい神社にまずは電話で連絡をする。番組には神職の方にも出演していただいたので、担当の神職さんと丁寧にやり取りしていった。打ち合わせは毎回楽しい。当然のことかもしれないが、神職の方は奉職しているお宮について誰よりも詳しく、愛情をもって話をしてくれる。ついつい打ち合わせ時間が長くなることも多かった。「撮る前」すなわち、準備段階での主な配慮を箇条書きにする。

・取材対象者との関係をつくる

神社に電話などで問い合わせの連絡をした後、番組の概要、内容等を記載した企画書を持参し、神社担当者と必ず打ち合わせを行う。

打ち合わせの際には撮影してはいけない場所、逆に神社として是非、案内したい場所、気をつけて欲しい表現なども細かにヒアリングする。担当者との打ち合わせ後、具体的にどのような番組の流れにするかを記載した「構成」を作成。構成は平藤先生、NHKのプロデューサーのチェックを受け、それを持って再度、神社担当者

と対面で打ち合わせするか、メールや電話でのやり取りを行う。

もちろん、撮影した映像を編集する段階で100%構成通りの内容にならないこともあるが、書面にして確認してもらうことは誤解や認識の違いを生まないため大切である。

・視聴者や制作側への配慮

神社や御祭神に関する内容は、歴史や出典が明確ではない場合が多い。そのため、「～です。」と言い切ることはできる限り避け、「～と言われている。」「～という説もある。」という表現を用いるよう、出演者の発言やナレーションなどでも気をつけた。神社独自の歴史や伝承であれば、そのことを明確に説明することとした。それは、制作側はもちろん、撮影に協力していただいた神社へのクレーム対策でもあり、視聴者に間違った情報を発信しないための当然の配慮でもある。テレビ番組などの映像は想像以上に影響が大きいことを忘れてはいけない。

御祭神に関して特筆すると、同じ神様でも『古事記』と『日本書紀』では神話の内容が違っており、片方の書物しか読んだことがない視聴者から「間違っている」と指摘される可能性があることを制作側は想定しなければならない。そのため、番組では基本的に『古事記』の神話を用いて説明することをルールとした。このような内容に関するデリケートな配慮に関しては、平藤先生の監修が非常に重要だった。分かりやすい例として構成の一部を抜粋した（図3）。

	パンサー「(答えて)」 平藤「(解説)」 ※建部大社の御祭神は、ヤマトタケルノミコトです。 ※こちらには景行天皇46年と書かれています。景行天皇は第12代の天皇。今の天皇陛下は、第126代ですから、建部大社がとても長い歴史がある神社だとわかりますね！←景行天皇は歴史上の人物とはいいにくいので、西暦ではふれないほうがいいです。 パンサー、ゲスト「(リアクション)」 パンサー向井「先生、建部大社のご利益はなんですか？」 平藤「神社のご利益はお祀りされている神様の得意分野です。ヤマトタケルの得意分野、ご利益は『災厄避け』です！」 パンサー向井「なぜヤマトタケルの得意分野が『災厄避け』なんですか？」 平藤「それは神話を学んでいけばわかります！」 パンサー向井「なるほど！」
■建部大社紹介 VTR/ (30秒)	●景行天皇46年、西暦116年に日本武尊を近江の地に祀ったのが草創。675年にこの場所に移った。←西暦をいうなら、～といわれている、とつける

図3 “構成”の一部抜粋。矢印の後の文（「←景行天皇は歴史上の人物とはいいいにくいので、西暦ではふれないほうがいいです。」「←西暦をいうなら、～といわれている、とつける」）は平藤先生が指摘してくださった部分。歴史的に曖昧な部分については特に表現に注意した。

3. 神社を「撮る際」の配慮

構成の確認が終わり、撮影日が決まると、いざ撮影となる。撮影日は神社側の都合、出演者のスケジュールを加味して決定する。神社側はお祭り、七五三などの参拝者が多い時期や時間帯は避けて欲しいとのことだった。撮影時の主な配慮は以下の通りである。

・撮影場所への配慮

入ってはいけない場所、撮影してはいけない場所等、事前に説明を受けた注意事項を守ることが基本である。これは、神社にかぎらず、ドラマや映画の撮影場所でも同様だ。

通常の撮影場所と異なる特筆すべき点は、拝殿や社殿の撮影に関する指示がある場合があること。例えば、真正面や、拝殿前の階段を上がった場所からの撮影禁止、接近やズームはしないよう指示のある場合があった。これは、神様に対する配慮だと言っても良いだろう。神聖な場所のため、カメラを向けること自体を禁止している場所があることもある。例として下図（図4、5）を参照。



図4 東京大神宮。拝殿を真正面から撮影すること、ズームして撮影することは避けるよう指示があった。



図5 伏見稲荷大社。階段の下からのみ撮影可能。

・参拝者への配慮

参拝者になるべく少ない時間等に撮影を行えるよう考慮したが、難しい場合も多々あった。元々、観光客などが多い神社は撮影場所に人が集まり、参拝客に迷惑をかける可能性があったため、人が集まらないよう、声掛けする人員を増やすなどして配慮した。

番組中、出演者は必ず拝殿で参拝する決まりだったが、その際も参拝者と同じ列に並ぶなど、絶対に撮影を優先しないよう心がけた。これも当然のことだが、撮影隊が一般の方に横柄な態度をとり、トラブルになることも稀にあるのでかなり気をつけている。最近SNS等で拡散されてしまうことも意識しなければならなくなっている。

・神様への配慮？

出演者はもちろん、スタッフも可能な限り、お参りをしてから撮影を行うよう心がけた。気持ちの問題ではあるが、個人的には境内にお邪魔させていただく挨拶は必要だと思い、撮影前のお参りは欠かさず行った。先述した通り、拝殿を真正面から撮らない、接近して撮らないなどの注意事項も神様への配慮に入るだろう。

4. 神社を「撮った後」の配慮

撮影が終わると、撮った映像をいよいよ番組として放送する形に編集していく。この段階はさらに注意と配慮が必要となる。

・プライバシーを守る

情報番組や報道では、背景として一般の方が映り込む場合には、そのひとりひとりに特別な許可は取らない。しかし、特定の人にズームしたり、インタビューしたりする際は番組で用意している出演許可の誓約書に署名をもらう決まりがある。

また、これは撮る際にも注意したが、絵馬や御札などに記載されている個人情報映らないように配慮した。映像を編集する際、画面で見て文字が分かってしまうような場合は、ぼかしを入れるなどの処理を行う。例えば、京都にある安井金比羅宮は“縁切り”の神社として有名である。神社のご利益が“縁切り”という特徴から、絵馬や御札に書かれた内容は特にデリケートなものが多く、撮影時にもそのことを念頭におき、編集の際には不自然でない程度にぼかしを入れた（図6）。



図6 安井金比羅宮の「縁切り縁結び碑（いし）」には願いの書かれた「形代（かたしろ）」（御札）がたくさん貼られている。御札に書かれた内容が読めないような撮影位置、編集を心がけた。

・写真、映像資料の許可

番組では撮影を行っていないが、内容の補足をするため、様々な神社の写真や動画を使用することが多々あった。その際は、各神社に番組で使用する旨の許可を取る必要がある。そこでも、神社ならではの注意事項があり、主なものは社殿や鳥居などにテロップ（文字の情報）を被せないように、というものであった（図7）。



図7 放映時に、鳥居の部分（上図に付した丸印で示した部分）にテロップがかからないよう位置に注意した。

・撮影場所への配慮

一般の参拝者は通常入れない場所、特別な期間のみしか入れない場所、拝観できないものをありがたいことに、番組で撮影させていただいた。しかし、それは前述の通り、神社からの特別な配慮のため、明確な情報のテロップを入れて撮影場所に迷惑がかからないよう気をつける必要があった。例えば、「いつ見れるのか?」「行ったら見れなかった」という問い合わせを避けるためである（図8）。

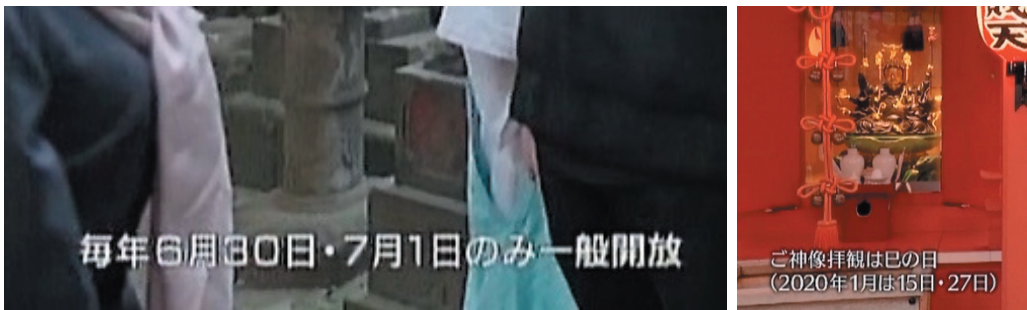


図8 特別な期間のみ入れる、拝観できるという明確な情報をテロップで入れる。

5. 実は関係が深かった？ 神社と映像業界

ここからは余談になるが、実は神社を「撮る」だけでなく、映像業界は神社と切っても切れない関係がある。それは私たちが「お祓い」と呼んでいる行事のことだ。本来なら「ご祈祷」と呼ばれるものだろう。映像業界における「お祓い」とは、映画やドラマの撮影が始まる前に、撮影の安全を願い、主に監督、主演、プロデューサーが神社でご祈祷を受ける恒例行事のことを指す。今回、発表にあたり改めて関係者に神社での撮影や「お祓い」についてアンケートを取ってみたので、ここに結果を報告する。アンケートは監督、助監督（監督の補佐をする役割）、制作部（撮影場所を探す、食事を用意するなど、撮影に関する様々なことを仕切る役職）、プロデューサーを対象とした。人数は12人程度。

Q. これまでに神社で撮影を行ったことがあるか

A. ほぼ全員あり

Q. 撮影の際、気をつけたことや注意したことなど

A. ※これに関しては前述した撮影に関する配慮とほぼ同じ回答だった

Q. 撮影とは関係ないときに神社へ行く習慣があるか

A. 全体的に、日常的に神社へ行く習慣がある者は少なかったが、人によっては習慣として毎月必ず行く人もいた

Q. 撮影前の「お祓い」は必要だと思うか。また、その理由

A. ほとんどのスタッフが「必要だと思う」と回答。その理由は以下の通り

- ・お祓いをやった方が撮影が無事に終了する確率が高い気がする
- ・気分的に安心
- ・安全や天候など、人の力だけではどうにもできないことがある
- ・お祓いを行わなかった作品で交通事故が起きてしまった
- ・人が亡くなる内容や、危険を伴う撮影がある場合は特に必要だと思う
- ・地方で撮影する際に地元の神社でお祓いをすることは、地元の方々への配慮でもある
- ・撮影で何かあったとき、「お祓いをしなかったから……」と思ってしまう
- ・お祓いにはスタッフが集まるので、撮影前に改めて結束力が高まる気がする

七五三や厄祓い、初詣と同じように気分的な問題が大きいのが、通年撮影を行っている私たちには切実な問題でもある。

今回の発表後、このアンケートについて面白い指摘があった。

「撮影の“安全祈願”(ときに作品のヒット祈願も含んでいる) というが、皆が求めているのは“祈願”なのか、“祓い”なのか、どちらなのだろう」

確かに、本来は「ご祈祷」と言われる撮影の安全祈願、すなわち「願う」行為を私たちは「お祓い」と呼ぶ。そして、アンケートの結果からも分かるように、気持ちは「事故が起きないように」「悪天候で撮影が延期などしないように」「悪いことが起きないように」など、何か目には見えない悪いモノを撮影から祓い、無事にクランクアップを迎えたい！という気持ちが強いようだ。だから私たちは「お祓い」と呼んでいるのかもしれない。撮影の「お祓い」という習慣がいつから始まったのか、その起源を探ることまではできなかったが、きっと、先人たちも撮影中に事故があったり、台風などの悪天候に襲われたりといった、予測不可能な自体に見舞われてきただろう。そういった人の力ではどうすることもできない、目に見えない“何か”を祓う必要性が「撮影前のお祓い」という行事を生み出したのかもしれない。

ちなみに、新型コロナウイルスによる「お祓い」への影響も当然ながらあった。拝殿に人が密集してしまうことは、神社側も配慮していたので、撮影スタッフだけ特別扱いしてもらうことはできない。そこで、オンラインを使ったご祈祷が問題ないか、撮影でお世話になった神社の神職さんに相談した。ご祈祷は神職が神様に対して行うため、必ずしもその場にスタッフがいないといけないということはないと助言をいただいた。コロナ禍における、初めてのオンライン「お祓い」。数名は直接神社へ行き、その様子をZOOMで繋ぎ、残りのスタッフは画面越しに「お祓い」を受けるという

ものだ。「そうまでしてやる必要があるのか」と言われると返す言葉もないが、前述のアンケート結果を見ていただければ、私たちの気持ちも分かっていただけるだろう。

おわりに

新型コロナウイルスによるパンデミックが起き、どの業界も大きな打撃を受けた。映像業界の精神的なダメージはかなり大きいものだったと思う。『世界中がこんな大変なことになっているのに、映画やドラマをつくっている場合なのか』。それは、3.11が起きたときも心に大きくのしかかった問題だった。「ドラマなんて再放送だけ流せばいい」「大勢が集まって撮影し、感染を広げている」そんな世間からの声に皆、傷ついた。“不要不急”という言葉が今でも嫌いである。映像はときに悪用されることもある。だが、人を楽しませるもの、救うものであることも信じている。フィクションによって幸せな世界を見せることも、希望を与えることもできるし、過去や未来、今起きている問題を表現することも自由自在だ。映像、エンタメは人間にとって必要なものだと強く信じている。

また、他の先生の発表にもあったようにドキュメンタリーは映像で「記録」することの価値も忘れてはいけぬ。そういった意味で私が手掛けた神社の番組は、エンターテインメントとして見ている人々を楽しませ、神社を記録するといった2つの面を併せ持つ大事な映像になったのではないだろうか。

最後に今回、研究者ではない私に、このような発表と出会いの機会をいただき、平藤喜久子先生にこの場を借りていま一度、感謝を伝えたい。ありがとうございました。

『趣味どきっ!』の番組以外で手掛けた神社関連の動画リンク

- JSPS 科研費 JP18H00615 「日本宗教教育の国際的プラットフォーム構築のための総合的研究」

神社に行こう 1 神社の中にあるもの ときわ台天祖神社（東京）

<https://youtu.be/wWiTGcByto8>

神社に行こう 2 神社に関わる人々 小野照崎神社（東京）

<https://youtu.be/LV2II-x1s-A>

神職を志す学生の日常

<https://youtu.be/ZOKW-iNB4kI>

※上記3つは平藤先生とのプロジェクト

●小野照崎神社「つくえ守り」紹介動画

<https://youtu.be/28LPHASiMVM>

國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所
2021年度国際研究フォーラム
「日本の宗教文化を撮る」報告書

令和5年2月28日 発行

発行者 平藤喜久子

編集担当 星野 靖二

吉永 博彰

川嶋 麗華

印刷所 株式会社 小薬印刷所

発行所 國學院大學研究開発推進機構日本文化研究所

東京都渋谷区東4丁目10番28号

郵便番号 150-8440

電話 03-5466-0162

FAX 03-5466-9237